（議長）
　次に小梅議員の発言を許可いたします。
　小梅議員。

「小梅議員」
　早速ですが、第１問目。まちづくりカフェ活動拠点のあり方についてをお尋ねいたします。
　まちづくりカフェは、誰もが住み慣れた地域で安心して暮らし続けられるように、また自分達が暮らしやすい所にするにはどうしたら良いか等、急激な高齢化により、公的サービスも限界に来ている今、多様化する地域の生活課題を住民の互助によって対応していくための学びの場で、平成２８年度から開始された事業です。
　ありがたいことに、居場所にもつながる待望の活動拠点が、昨年新地町の檜山ハイヤービルに江差ＢＡＳＥとして誕生いたしました。活動日は現在、土曜日、日曜日、祝祭日を除く平日の午前１０時から午後４時までで、生活支援コーディネーターが交替で対応しております。このように役場が主導、役場の日程に合わせての活動日では、住民活動の拠点としては物足りなさを感じております。生活も多様化している昨今、もっと幅広く活用するための手段がないのか。休日や夜間の利用方法も含んだ、今後の方向性、あり方をどの様に考えているかお尋ねします。
　また合わせて、今まで拠点においての活動の中で、その内容、それから利用者数、また集まっている町民の中から何か要望等ありましたらお知らせ下さい。

（議長）
　町長。

「町長」
　小梅議員からのまちづくりカフェ活動拠点のあり方についてのご質問にお答えいたします。
　平成２８年度から、地域の絆を深め互いに助け合えるような街とするべく活動が始まったまちづくりカフェでございますが、昨年４年目を迎えるにあたり、これまでの活動をより活発化させ、各地域への互助の繋がりを強めるために、自由に活動が出来る場所として、議員の皆様のご理解を得ながら、新地町の檜山ハイヤービルにまちづくりカフェ活動拠点江差ベースプラスワンを開設するに至りました。
　先に、施設の利用状況につきましてご報告申し上げます。昨年５月の連休明けから開設し、本年２月までの１０か月間におきまして、一般の来場者が延べ１，４１３人、まちづくりカフェの活動や町の事業などによる来場者が１，０３１人で、合計して延べ２，４４４人の方が来場されております。活動等における利用回数は８６回であり、まちづくりカ

フェの開催を始め、代表者部会や５つのプロジェクトチームが主体となった活動が、その大半を占めております。また、町主催のケアカフェ、認知症カフェの会場としても利用しております。

次に、江差ベースの開設日程でございますが、議員ご承知のとおり、現在、町の勤務条件に基づき３名の生活支援コーディネーターが、平日１名ずつ常駐して運営をサポートしております。

まちづくりカフェは、地域での困り事や課題を皆でどうすれば解決できるのかを考え、それを実践していく組織です。その活動を取り進める場所である江差ベースの運営についても同様であり、自分達が自立した形で独自に運営をしていく事を目標としているところであります。

それを踏まえ、昨年、試験的に参加メンバーだけで休日開設を行ったところですが、恒常的に休日開設を行うには、管理を担って頂ける方や時間帯等の問題もあり、検討が必要な状況にあります。

町として休日開設を行うために職員を常駐させることは容易ですが、それではまちづくりカフェの存在意義を無くしてしまうものであり、本来の主旨にそぐわないものとなってしまいますので、今後どのように対応し、取り進めて行くかをまちづくりカフェのメンバーの皆さんと共に考えて参りたいと思っております。

また、３階、４階があまり使われていない。調理設備がない。活動内容の周知がされていないなどの課題も出されておりますが、各階の有効活用の検討や活動の情報発信を行うための新たなプロジェクトチームも立ち上がっており、様々な課題に対して自主的に検討し、対応策を生み出していく形が醸成されてきているところでございます。

一歩一歩前に進んでいる状況であり、引き続き北海道教育大学函館校の齋藤准教授からのご助言を賜わりながら、これらの活動について、町としても全面的にサポートして参りたいと考えております。

（議長）

はい、小梅議員。

「小梅議員」

はい、分かりました。

それでは第２問いきます。

広報えさしについてでございます。

広報は町民に町の出来事を伝える大切なものです。手に取って読んでくれることに意義があります。色々な集まりの中で、私が良く聞くことに、広報は見るからに難しそうで、あまり読まないということを耳にします。その度に、ええなんでって心が痛みます。下のロビーに檜山近隣町の広報が置かれてますが、どこの町のもちょっとカラーが入ってて、

アクセントというかポイントがあって、江差の広報から比べると目を引きます。
　江差町の広報は２０１９年１月号のみカラーの表紙で、子どもたちの笑顔がとっても素敵でした。それ以来、ただ真っ黒です。特にお祭りとか追分大会とか大きな行事があって、写真が多く載せられるときほど、紙面が黒いんです。あの姥神大神宮渡御祭のきらびやかさとか賑わいとか勇壮さ、そういうものが全然感じられない。とっても残念に思ってます。
　どんなに内容が充実していても読んでもらわなければ意味がありません。
　読みたくなるような見た目も大事です。
　この頃は会議の資料とか、毎日配られる新聞も結構色々なところ、ポイントがあってカラフルで、何書いてるんだろうと興味がわきます。
　広報は全ての住民に公平に配られる身近な情報源です。
　多くの町民が興味を持って、親しんでくれるような紙面づくり。目を引く様にアクセント的にでもカラーを入れたりするのは、予算面で難しいのでしょうか。
　また、町外にも届けられてると思うんですが、その部数はどれくらいあるのかお知らせ下さい。

（議長）
　はい、町長。

「町長」
　小梅議員の広報えさしについてもご質問にお答えいたします。
　インターネット全盛期の中、様々な活動の情報発信をＷｅｂ中心に行う団体が増えてきておりますが、広報誌にはネットを使わない人から使う人まで見てもらえる、手軽に読める、手元に保存できる等といった紙媒体ならではの良さがあり、町といたしましても、住民と行政を繋ぐ大切な情報ツールと位置付けているところでございます。
　また、私自身も報道関係に努めていた経験から、担当課へは正確な情報の発信と町民の皆様の手に取って頂くための紙面の内容の充実を求めてきたところであります。
　始めに１点目の表紙等のカラーの印刷についてでございますが、全ての紙面のカラー印刷までとはいきませんが、本年度議員ご指摘のとおり、姥神大神宮渡御祭等、色彩と取り入れた方がより臨場感が増す場面には、予算の範囲内において、効果的にカラー印刷を行ってまいりたいと考えておりますので、ご理解願いたいと思います。
　また、２点目の町外に発送している広報誌の部数でありますが、令和元年度は道内外含め、個人が６８名、官公庁等の団体が５０となっています。

（議長）
　いいですか。

「小梅議員」
はい分かりました。よろしくお願いします。

（議長）
以上で、小梅議員の一般質問を終わります。